

俳句雑誌



空

令和4年4月30日発行

第20巻1号

通巻第101号



2022・4・5

SORA 101号

空集抄 柴田佐知子抄出

柿を干す父の残せし荒縄に

高倉和子

新藁を積みたる納屋に猫眠る

石橋幾代

マフラー入れ柩の犬にありがとう

中田みなみ

仮の世の外に世のなし返り花

角野良生

秋燕や転舵にくぼむ潮の帯

深川淑枝

水溜りの空まつ青や運動会

戸栗末廣

一塊の雲動き出す海鼠桶

山本則男

シヨーウインドーのホルンの光降誕祭

山田正子

鳥葬のごと捨案山子へと鴉

林徹也

波打つてぬかるみ乾く葱の花

吉田 律

番犬は吠ゆる気もなき十夜寺

曾根富久恵

立冬や松の根が嘔む防塁趾

永淵恵子

児の手引く父も歌ひて小六月

今井康子

芋虫をのせし児の手もふつくらと

えとう樹里

捨て鉢になりたきことも葱刻む

吉田悦子

地下足袋の底の飴いろ冬隣

原 友子

すぐに夫見失ひたる年の市

田中とし江

ふとん屋の古き看板実南天

横田敬子

ビルとなり他校のごとし鱗雲

森田明成

四阿に獣集まる十三夜

坂口 学

石路の花人には見せぬ意地つ張り

田岡千章

古木魚叩き比べて冬ぬくし

神田たみ子

検針員終の花零しけり

井上和子





流木を冬の怒濤へ投げ返す

大西 乃子

時雨るるや棟梁憩ふ材木屋

岩下きぬ代

新蕎麦を打つ老人の力瘤

押田裕見子

黒犬は鋼のごとし枯木立

中村瑞枝

空蟬の背に吹き口のありにけり

野中みのり

かくれんぼ十かぞふれば冬夕焼

松井順子

敗荷の触れ合ふ音や夕間暮れ

河原敬子

子の遺影の前でいただく新走り

倉智万数雄

吠えたつる犬の歯茎や寒に入る

兒玉充代

蝶二頭猫躍らせて舞ひ上がる

田中素直

雁の棹体育授業の中断す

窪みち子

冬ごもり絵本の角の丸くなり

高畑 桂

街路樹の枯れて高さを競ひけり

高畠 浩一

いわし雲呼び鈴で来る渡し舟

荷宿 克代

夏休み畳の縁のご飯粒

松尾 康代

猫が爪研ぎし柱や盆休み

小島 翠波

結局はどこへも行かず秋うらら

むつみ 蓮

大根の洗ひ甲斐ある白さかな

石井みゆき

夕暮れの茜の中に麦を播く

牧 康子

生ききつて何も残さず霜の花

矢野 綾子

綿虫の舞へば日暮の早くなる

大谷 政光

初冠雪解けたる富士のつまらなし

林 れい

寒風を鋸山がはね返す

附出 勇人

敬ひて声裏返る御慶かな

あさなが 捷

椎拾ふ遠流の島を思ひつつ

岩井 京子

柿吊す日差しの裾に猫眠る

岡村 尚子

空集作品評

柴田佐知子

柿を干す父の残せし荒縄に
高倉 和子
父が残したものと杖とか帽子など身辺のものが詠まれることが多いが、〈荒縄〉とは意外であった。和子さんのお父様は立派な門松や華やかな注連飾を作られていたという。農作業で使う縄も何束も纏っておられたのであろう。懐かしさと切なさが混じりあう作品だ。

新藁を積みたる納屋に猫眠る
石橋 幾代
藁を積んだ納屋とは懐かしい。従弟達と登るのが楽しく、藁の山を崩してしまい叱られたものだ。新藁の匂いが好きだった。あの匂いに包まれた幸せな猫の眠りである。

仮の世の外に世のなし返り花
角野 良生
〈仮の世〉を去って「常世」の国へいくなんて考えは甘いよと、さらりと言われてしまった。この現実

世でお終いさと…。無常観さえも跳ね飛ばすような〈仮の世の外に世のなし〉というきっぱりとした断定が潔い。生きる覚悟を試されるような句である。

秋燕や転舵にくぼむ潮の帯
深川 淑枝
真っ青な海に潮の筋がくつきりと見えているのであろう。船が舵を切り海をえぐるように進路を変えているところだ。〈転舵にくぼむ潮の帯〉とは見事な言葉の選択と配置である。〈秋燕〉のスピード感もいい。写生の眼が効いた鮮やかな作品である。

水溜りの空まつ青や運動会
戸栗 末廣
水溜りに空や雲が映っているという句は多いのだが、〈水溜りの空まつ青や〉と歯切れがいい。その小さな景から〈運動会〉への転換もダイナミックだ。静かなのかと思いきや下五で一気にひっくり返されて子供達の歓声があがる活気に満ちた〈運動会〉へと放り出されるのだから面白い。

鳥葬のごと捨案山子へと鴉
林 徹也
いきなり映像が見える。ムンクの「叫び」の、不

穏さにも似た色調である。横たわる人の形を模した〈捨案山子〉と〈鳥葬〉の組合せの中で鴉の黒さが印象的である。

芋虫をのせし児の手もかつくらと
えとう樹里
芋虫を触ったことがある人は分かるだろう。ころころと太った芋虫とそれにふさわしい幼子の手。へふつくらと〉が的確だ。

地下足袋の底の飴いろ冬隣
原 友子
叔母が畑や蜜柑山に行くときは、必ず地下足袋であった。小川の石を跳んで渡るときも、滑りやすい赤土の山道もこれさえ履けば安心だ。殊に足の動きにフィットするゴムの足袋底は働く者の大きな味方である。そのゴム底の色を表現せよと言われたとしたらどうだろう。私は〈飴いろ〉という言葉は全く思いつかない。確かに飴色だ。秋の収穫作業もほぼ終わり山野の色も変わってきた頃。季語の〈冬隣〉が絶妙だ。

空蟬の背に吹き口のありにけり
野中みのり

空蟬の背中が割れているでは、見たままの説明の域を出ない。みのりさんは、そこをもう数歩踏みこんで〈背に吹き口のありにけり〉という独自の表現を得た。〈吹き口〉によって透けた紙風船のような空蟬の姿までも見事に捉えられている。

夏休み畳の縁のご飯粒
松尾 康代
いつもは静かな暮しなのだろう。子供が襲来する夏休み。ご飯粒だつてこぼれよう。〈畳の縁のご飯粒〉という即物的表現で、賑やかな光景が描き出されている。

その他とり上げたかった句より一部をあげる。

マフラー入れ板の犬にありがどう
中田みなみ
検針員袴の花零しけり
井上 和子
流木を冬の怒濤へ投げ返す
大西 乃子
時雨るるや棟梁憩ふ材木屋
岩下きぬ代
綿虫の舞へば日暮の早くなる
大谷 政光
吠えたつる犬の歯茎や寒に入る
兒玉 充代
初冠雪解けたる富士のつまらなし
林 れい



稲刈を終へたる村へ山迫る

直方 石橋幾代

秋晴やまた飛んでゐる放ち鶏

襲ひかかるやうに崩るる大焚火

新藁を積みたる納屋に猫眠る

親方が仕上げにかかる松手入

自づから径出来てゐる芒原

うつし世の果てかと思ふ夕花野

マフラー入れ柩の犬にありがとう 東京 中田みなみ

藪抜けて声かけらるる初雀

指回る指輪正して屠蘇祝ふ

囀や真白に乾くズック靴

紙雛の膝糊付けにして流す

ふかふかの山に置きたる茸籠

福岡 高倉和子

土ほぐすほどの雨粒秋収め

用の無き畦道となり蟋蟀飛ぶ

柿を干す父の残せし荒縄に

猪の直進山を脅しけり

ひと言に広がる不穏暖炉燃ゆ

切り傷の指が脈打つ夜の火事

あつさりと流るる雛へ小走りす

長崎忌墓も暮しも急斜面

福岡 角野良生

煤煙は昭和の匂ひ鰯雲

親指の爪包丁や鱗裂く

まだ捨てぬ制服疲労感謝の日

仮の世の外に世のなし返り花

鷹ゆきし高さにゆるぶ沖の雲

北州 深川淑枝

鷹渡り終へ海鳴りの街残る

秋潮の音なく速し平家塚

秋燕や転舵にくぼむ潮の帯

雁渡し海洋葬の船の笛

東京 山田正子

水溜りの空まつ青や運動会

広島 戸栗末廣

角切られ貧しきお顔となりにけり

年寄の朝の愉しみ鳴子引

豊年や声の小さき大男

瓢箪のぶら下がりゐる快樂かな

一塊の雲動き出す海鼠桶

寒卵明日へひとつ残し置く

源流は落葉の中に埋もれをり

言霊のあふれて来たる龍の玉

焚火して海の機嫌を見てをりぬ

どんぐりや縄文人は火を創り

炉話は天狗のしわざ神隠し

膳本に思はぬ事実鳳仙花

兵庫 岩井京子

やはらかき落葉染しみつつ歩む
寒禽の声のみ通る竹林
冬早海鵜飛び来る朝の川
花枝思ひ届かぬことばかり
ことのほか大きくなりしレモン採る

兵庫 青木朋子

作業着の洗ひざらしを案山子翁
顔透けてペットボトルの案山子かな
稲の香や肩甲骨を回しつつ
秋気澄む法界定印初座禅
頬に手の施薬観音薄紅葉

兵庫 えとう樹里

角切りの追ひつめられし息づかひ
角切りの縄一本に息つめて
廢園のドリームランド鳥渡る
天平の御仏誘ふ稲穂道
えびぞりにかたまる赤子小六月

北海道 押田裕見

夕映えの大河を泳ぐ迷ひ熊
善人になれさうな気が新豆腐
木登りの少女の呼べる秋茜
病床のあの子の窓へ照紅葉
宝物隠したくなる落葉道

福岡 永淵恵子

小鳥来るレトロの駅の丸時計
長き夜の伏線からむミステリー
遺言はもう書いてある衣被
花嫁の放りしブーケ小六月
綿菓子に機嫌のなほる七五三

北九州 兒玉充代

身を正す寒さ好もし書を開く
初時雨木の香のしるき落し蓋
冬霧晴れ紺ふくいくと山の襷
冬の鳶影の届かぬ高さもて
掃きかけの落葉きのふがそのままに

福岡 栗原京子

吊橋の下より暮るる紅葉狩
罫の木悲鳴上げをり秋の暮
手作りの杖束ね置く紅葉寺
小春日や病持つ木に紐つけて
脱稿の冬空抜くる鳥の群れ

兵庫 林徹也

秋めくや背鰭あらはに沼の主
磔像の脾腹をぬぐふ煤払
箸取るも置くも合掌大根焚
和尚にも婆にも合掌大根焚
説法は付録にあらざ大根焚

兵庫 岡村尚子

秋夕焼猫の耳まで透けてをり

秋の風組体操のてつぺんに

鉢物のつぼみを数へ文化の日

石仏に白の小菊を一掴み

山茶花のまはりに鳥の声あふれ

